

埴谷雄高の観念小説『死霊』と〈個人的な体験〉

——ドストエフスキイとの関わりを中心に——

国松夏紀

埴谷雄高とドストエフスキイ、或いは前者の未だ書き続けられている唯一の長篇小説『死霊』と後者の諸作品、とりわけ題名の類似もあつて『悪霊』との深い関わりは、自明のことのように思われがちである。埴谷雄高自身、ドストエフスキイとその作品について繰り返し論じ、講演し、対談し、それらを集めたものが一三二二頁に及ぶ『ドストエフスキイ全論集』^(註1)として上梓されてきているからである。また、『死霊』の「自序」にはドストエフスキイへの次のような言及も見られるのである。

《私個人についていえば、私は『大審問官』の作者から、文学が一つの形而上学たり得ることを学んだ。そして、その瞬間から彼に睨まれたと言ひ得る。私は彼の酷しい眼を感じる。絶えざる彼の監視を私は感ずる。ただその作品を読んだというだけで私は彼への無限の責任を感じざるを得ない。それは如何に耐えがたい責任であることだろう。とうてい不可能な一步をしかも踏み出さねばならぬということ。私はついにせめて一つの観念小説なりともでつち上げねばならぬと思ひ至つた。やけのやんばちである。》^(註2)

(傍点は引用者)

また、ドストエフスキイの『悪霊』から血と肉を取り去つて、観念だけを残したのが自分の『死霊』である、とは埴谷雄高のしばしば語るところである。

しかし、このように一見自明と思われるところにも、あまりにも当然なのでかえつて見過ごされがちな比較文学的課題は残されている。それは、要約するならば、埴谷雄高がドストエフスキイから何を受容し、とりわけ『死霊』という作品においてそれを如何に越えようとしているか、という問題である。この課題について、埴谷雄高の「伝記」的な側面からと、作品としての『死霊』に即する面からとの両面から、従来の論を補充し発展させようとするのが、本論の意図するところである。

まず、ドストエフスキイと埴谷雄高の実生活上の類似と差異の問題がある。それを考えるには、少々遠回りではあつても、ロシアと日本、或いは両国の「近代化」の問題に遡るのぼつて見る必要がある。周知のように、明治日本は、ヨーロッパを「規範」として「近代化」を推進したが、そこには「文学の近代化」も含まれていた。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツと順次「規範」の中心が転移して行く中でロシアを眺めた際、そこからは他の欧米諸国とは違い撰取すべきものはすでに「文学」ぐらしか残されていないかに思われたのである。幕末から明治初年にかけて、多くの留學生がロシアを敬遠した所以である。

ところが、そのロシアこそは、日本に一五〇年ほど先駆けて、十七世紀末から十八世紀初頭にかけてのピョートル大帝時代以来、

まさに西欧を「規範」として強引とも思われる「近代化」を遂行していたのである。そして、十九世紀ロシア文学の中心課題は、『ロシア対西欧』ということであった。つまり、近代日本においてやがて深刻となる「欧化」の問題は、すでに十九世紀ロシア文学において、ドストエフスキイを含む多くの作家・詩人・思想家たちによって、大小様々なかたちで論じられていたのであった。この点が、ロシア文学に対する文学者ばかりではなく日本人一般の親近感の根本的な由来である。ロシア文学の課題が、自分たちの文学の課題でもあることに日本人は気がついたのである。

勿論、右のような親近性は、日本とロシアの地理的な位置関係にも由来する。ロシアは、ウラル山脈以西のヨーロッパ部分と、以東の広大なシベリア——アジア部分とにまたがっている。ロシアは、自からがヨーロッパに属するのかアジアに属するのかに悩み続けて来た。それはまさに、シベリアの極東部分に近接する近代日本の苦悩でもあった。

埴谷雄高とドストエフスキイの問題を考えるに際しても、以上のような基本的視野を見失うことは出来ない。つまり、両作家の親近性ももとをただせばこの辺りに淵源を持つと思われるからである。さてそこで、もう少し焦点をしばって両者の時代と実生活上の転機の種類と差異について考えて見よう。

まず、ドストエフスキイの前半生は、ニコライ一世の治政と重なる。ネクラソフとベリンスキイの推賞によって華々しく文壇に登場した作家は、やがて革命的サークルに参加し、一八四九年「ペトラシェフスキイ事件」に連座してシベリアに流刑される。前年、パリで勃発した民衆暴動「二月革命」とその余波を憂慮した皇帝の予防的弾圧政策の餌食にされたのであり、「ペトラシェフスキイの会」そのものは比較的温和な結社であった、と言われる。或いは、ドス

トエフスキイは、現実的に過激な分派活動に深入りしていた、とも言われる。いずれにしても、その後ほぼ十年に及ぶシベリア体験は、ドストエフスキイの生涯の分岐点となった。その体験の内実に関しては様々に議論の別れるところであるが、一般的には或いは当時の受けとられ方としては、一八五九年に「悔悟せる作家」として首都ペテルブルグに帰還した。この帰還は実のところ、シベリア帰りの作家にとっては絶好の機会であった。

ドストエフスキイが徒刑は解かれたものの一兵卒として未だシベリアにいた一八五五年、苛酷な政治を断行したニコライ一世は亡くなり、次いで即位したアレクサンドル二世は、前皇帝に比較してのことではあっても、理解ある政治を試みた。だからこそ、前皇帝の犠牲となったドストエフスキイも首都に復帰することが出来たのであるが、とりわけ、一八六一年の「農奴解放令」は画期的処断であった。封建ロシアの政治的経済的基盤を「上から」改革しようとするこの政策によって、ロシアには一挙に「解放的雰囲気」がみなぎることになった。この「解放感」の中で、ドストエフスキイは後期の盛んな作家活動を展開し、『罪と罰』以降『カラマゾフの兄弟』にいたる長篇群も執筆される。一方、前皇帝ニコライ一世治下に押え込まれていた革命運動も息を吹き返し、或いは過激化して、皮肉なことにこの「解放皇帝」アレクサンドル二世は、ドストエフスキイが亡くなったのと同じ一八八一年、暗殺される。

その間、ドストエフスキイは、皇帝側近・宗務庁長官ポペドノースツェフや「反動的」編集者カトコフと密接なつながりを持ち、彼らの陣営に属する「保守派の大物」と目された。事実、ドストエフスキイの後期長篇のほとんどは、このカトコフの主宰する有力雑誌「ロシア報知」に掲載されたのである。

問題を明確にし、埴谷雄高と対比するために敢えて単純化する

と、ドストエフスキイの生涯とその時代の見取図は右のようになる。これに対して、埴谷雄高の方も、敢えてドストエフスキイとの対比点だけを簡略化するならば、次のように把握される。

ドストエフスキイの九十年ほど後、一九一〇年、つまり明治四十三年に生まれた埴谷雄高は、昭和初年代に左翼運動に参加、「満州事変」が勃発した昭和六年には、日本共産党に入党する。しかし、「五・一五事件」の昭和七年三月、当時の一連の左翼弾圧のもと、不敬罪と治安維持法違反で検挙され、以来翌年十一月に出所するまでの一年余を豊多摩刑務所の《独房》ですごすことになる。埴谷雄高自身《妄想の揺籃》と呼んでいるこの《独房》での体験と出所後のドストエフスキイ耽読とが、彼の極めて重要な転機をなす。ここに、明らかにドストエフスキイのシベリア体験が重なり、だからこそそのドストエフスキイ耽読であつたと考えることが出来るであらう。しかし、ここで少し注意しておかなければならないのは、同様に収監された局限状況であるとはいへ、ドストエフスキイと埴谷雄高とは、微妙でありながらも意味では重大な差異があるということである。つまり、ドストエフスキイは《雑居房》であつたが、埴谷雄高は《独房》であつた。ドストエフスキイはむしろ、《雑居房》の中で、けつして孤独になり得ないこと、それを流刑中最大の苦痛として後に訴えさえている。このことが、かえつてドストエフスキイに「ロシアの民衆の現実」への目を開かせる契機をなし、若く青白きインテリゲンツィアを鍛え直すことにもなつた、と考えられることも出来る。これに対して、埴谷雄高の《独房》は、前述の如く《妄想の揺籃》であり、ドストエフスキイの《地下室》の如く出口のない観念の堂々巡りの場であつたかと推測される。とすれば、《地下室》からの脱出口を探り、群がり寄せせる諸観念に方向性とかたちとを与えるためにも、それを百年前に試みたドストエフスキイ

は熟読されねばならない。

とは言へ、埴谷雄高のドストエフスキイ研究の成果が噴出するのには、戦中の雌伏期を経て後、「第一次戦後派」の登場というよりはむしろ同人誌「近代文学」の創刊をまたねばならない。「終戦」はその当初、雌伏していた様々な人々にとって「解放」の時代の到来と思われたのだった。

さてそこで、ドストエフスキイと相似的体験とその時代を共有する埴谷雄高が、ドストエフスキイから継承したものは、何であつたらうか。それは、まず第一に《生命力》乃至《持続力》であつたらう。

ゴーゴリの再来ともてはやされる新進作家から一夜にして政治犯、死刑囚、そしてまた一転してシベリア流刑という苛酷な体験にも屈することなく、ねばり強い嘆願を重ねて首都に帰還し、その後も周知の如く、しばしば癩癩の発作に襲われ、身内のものも含む債権者に追われ、編集者からの前借りと原稿不切に追われ、新妻とヨーロッパ中を放浪し、ルーレット賭博に狂つて所持金をすべて費消する——等々実生活上の辛酸を舐めつくしながらも、創作力に関しては衰えを見せることなく、ベートーヴェンの九つの交響曲にもなぞらえられる大長篇を次々と執筆する。ここに見られる、ドストエフスキイ自身がしばしば自負していた《猫の生命力》は、埴谷雄高において《死霊》を書きついで行く《持続力》として、八十歳を過ぎてなおこの「観念小説」の構築に倦むことを知らぬ《生命力》として継承されているものと思われる。

『死霊』の「創作史」は、その発想から現在発表されている最後の章である「八章 月光のなかで」に至るまで、実に半世紀を越える。ドストエフスキイから継承された埴谷雄高の《持続力》を示すこの「創作史」を少し具体的に述べておこう。

前述のように、昭和七年から八年にかけて埴谷雄高は、豊多摩印刷所に服役していたが、その際、『独房』において『死霊』の原型が構想されたと言われる。

昭和十四、十五年、同人誌「構想」に、アフォーリズム「不合理ゆえに吾信ず」が連載される。そこに、『死霊』における諸観念の原型があらわれる。

昭和二十一、二十四年、同人誌「近代文学」に『死霊』を連載するのだが、『四章』途中で中絶。

昭和二十三年、『三章』までを含む『死霊』最初の単行本が真善美社より刊行される。続刊予告もされたが、この第一巻の売行不振で版元自体が倒産。昭和三十一年、近代生活社版『死霊』（同じく「三章」まで）が、刊行されたが、やはり売れず、版元もまた倒産する。これら両書は、『幻の名著』として入手困難、古書価格は高騰したと言われる。

その後、学芸書林の文学叢書中の一冊『存在の探求（上）』（昭和四十二年）に収録されるに及んで、一般的にも普及する。さらに、集英社版日本文学全集第八十四巻『埴谷雄高・堀田善衛集』（昭和四十三年）や、河出書房新社版『埴谷雄高著作集』第一巻（昭和四十六年）に収録されるに従い『幻の名著』はいよいよその姿をあらわすとともに、『四章』以下の発表が待望された。

そこに、昭和五十年、『群像』七月号に『五章 夢魔の世界』が発表される。翌五十一年、中絶していた『四章』も完成し、『一章』から『五章』を含む講談社版『死霊』刊行。

昭和五十六年、『群像』四月号に、『六章 《愁いの王》』を発表。昭和五十九年、『群像』十月号に、『七章 《最後の審判》』を発表。昭和六十一年、『群像』九月号に、『八章 月光のなかで』を発表。

それから四年余、もうソロソロ次なる章が、と期待されるところ

であるが、今のところ姿を見せてはいない。「八章」までは、全篇で『五日間の物語』となる構想のうち、二日目の夜にまで到り着いているにすぎない。

*

『死霊』の読者は、『自序』において、この作品がドストエフスキイを読んだことへの責任を果すべき「観念小説」であり、その方法は、「極端化と曖昧化と神秘化——」であることを承知している。それでもなお、「悪意と深淵の間に彷徨いつつ／宇宙のごとく／私語する死霊達」というエピソードに眩惑されつつ、次のような冒頭の一節を読むことになる。

《最近の記録には嘗て存在しなかったといわれるほど激しい、不気味な暑気がつづき、そのため、自然的にも社会的にも不吉な事件が相次いで起った或る夏も終わりの或る曇った、蒸暑い日の午前、××風癪病院の古風な正門を、一人の瘦せぎすな長身の青年が通りすぎた。》

この一節は、『自序』からドストエフスキイへの想念を引きずっていた読者に、『罪と罰』の忘れ難い冒頭の一節を思い起こさせるに違いない。

《七月はじめ、めつぼう暑いさかりのある日ぐれどき、ひとりの青年が、S横町のせまくるしい間借り部屋からおもてに出て、のろくさと、どこかためらいがちに、K橋のほうへ歩きだした。》

（江川卓訳）

右の本文にはあらわれていないのだが、『罪と罰』の舞台となつた一八六五年当時のペテルブルグにおいて、記録的な猛暑が続き火災その他の事件が頻発したことが知られており、ドストエフスキイを「耽読」した埴谷雄高の『死霊』の冒頭は、そのようなことまで

も踏まえられているのかも知れない。いずれにしても、ドストエフスキイを案内人のようにしてこの難解と言われる『死霊』の物語世界に読者は入って行かざるを得ず、そうした意識からすると、「一章 癡狂院にて」において、三輪与志、矢場徹吾、首猛夫等々の主要人物がいつの間にか全員集合しているのも、ドストエフスキイが得意としたところの手法に思われて来る。

しかし、このようなドストエフスキイの一節やイメージ、或いは人物像、手法、そして「観念」等を網羅的に抽出して行くことは勿論必要であり、比較文学的にも興味深い作業ではあるが、それはいわばキリがないとも考えられる。そこで、本論改では、より根本的中心的な問題にしばって考えることにしよう。

すでに述べたように、『死霊』という題名から否応なく『悪霊』を念頭においていた読者は、与志の兄高志、高志の友人で「黙狂」と呼ばれる矢場徹吾、そして首猛夫といったグループの動きから、『死霊』も『悪霊』と同様に「革命」の問題が提出されていると予感していた。それは、「五章 夢魔の世界」で現実のものとなる。高志のかつての恋人の「自殺Ⅱ心中」に絡んで、高志のかかわった「査問Ⅱ殺人事件」の全貌が明らかになるからである。昭和九年一月に発覚した所謂「赤色リンチ事件」を思わせるこの叙述において、『死霊』と『悪霊』の距離は急激に短縮される。『死霊』における《「一角犀」殺し》とやはり現実における《イワーノフ殺し》に取材した『悪霊』の《シャートフ殺し》が重ね合わされる。

しかしながら、『死霊』にとつて重要なのは、その先である。「革命結社を結束させるためには何よりも血の犠牲を必要とする」というような理論から、自からが神になるべく自殺を敢行するというように、『死霊』においては、それを「存在の革命」へと飛躍的に

展開させた。

そのことは、『死霊』においては主に三輪与志に胚胎する。与志の《自同律の不快》とは、自分が自分であること、人間が人間でしかあり得ないことへの不快感であり、《虚体論》は実体にあらざるものを論じ、人間（実体）はついに人間を超え得る（虚体）か、否かを論じたものであった。

与志の胚胎する思想（観念）は、彼の婚約者津田安寿子にとつても《謎》である。「六章 《愁いの王》」に至って安寿子は、住み込んでいる図書館の本をことごとく読破した黒川建吉による与志の《謎》の解明を聴取することになる。

《与志の目指すものは》自分自身だけによる唯一無二の自己増殖です。（中略）これまでの存在のなかにも、これからの存在のなかにもまったく怖ろしい三輪自身による「自己自身」のまったく新しい、まったく怖ろしい「宇宙はじめて」の創出がそこにあります。そのとき、この世界は一変する筈です。（中略）「そと」からつくられた私でなく、自らつくる私について考えに考えつつけて、全存在のすべてのすべてから「自身」をきっぱりとひき離す全存在への反抗と拒否を敢えて唯一の自己課題としたのは、この長い長い存在史のなかで、三輪ひとりしかいません。そして、その踏み出しの踏み出しを考えに考えつつけて、三輪は、そのはじめのはじめにいま立ちどまっているのです。》

政治的の革命から「存在の革命」への転回について、作者の植谷雄高自身は次のように述べている。同じ趣旨のことはしばしば述べているところであるが、大岡昇平との長篇対談『二つの同時代史』から引く。

《ぼくは刑務所の独房にいたために、ただ妄想をたくましくするだけの方向に行ったんだね。そこで植民地台湾で得た日本人なら

い、人間ざらいが昂じて、人間の社会革命だけではだめで、いまの人間というものは、とにかく単細胞の出現後数十億年たつてようやく人間になったわけだから、あとまた数十億年たてば、いまはとうてい考えられないような人間以外の何かに、自然淘汰によつてなつていくはずだ、もし人類がそれまで生きているとすればね。 / それで刑務所の中でぼくが考えたのは、自然が何十億年たつてやることを、化学の実験室の中ではおそろく二、三年でできるだろう、しかしそれをぼくは本の中で数時間でやつてやろう、ということなんだ。つまり、自然の中で生物がさらに数十億年かけてやる変化の過程を、ぼくの好む人間の方向性にむけてただぼくの本の中だけでやつてしまおうと決めただよ。人間の革命、ということとは畢竟存在の革命ということだね。(傍点は引用者)

*

「第五章 夢魔の世界」「第六章 《愁いの王》と『悪霊』に導かれつつ、それに重ね合わせるように難澁しながらも『死霊』を読み進んで来た読者にとつて、『死霊』が突然『カラマゾフの兄弟』の様相さえ帯て来るのは、『七章 《最後の審判》」に至つてのことである。そこでは、『悪霊』の狂言回し役||扇動者ピョートル・ヴェルホヴェーンスキイを思わせていた首猛夫の口から意外な事実が暴露される。自分の父は、三輪高志・与志兄弟の父広志と同一人物であり、かつまた、『黙狂』矢場徹吾の父も同じだ、というのである。これらのいずれ劣らぬ独特の個性の持ち主たる異母兄弟は、直接的に『カラマゾフの兄弟』におけるドミトリイ、イワン、アリオシヤ、そして『私生児』たるスメルジャコフ——これら四人の異母兄弟を想起させずにはおかない。(ただし、三輪高志・与志兄弟の母親は同一であるごとく、イワンとアリオシヤの母親も同一であ

る)。

『カラマゾフの兄弟』におけるテーマは、エピグラフにある「ヨハネ福音書」の《一粒の麦》、「西欧派」イワンが語りスメルジャコフに父親フォードル殺しの動機を与えるところの《神がなければすべては許されてある》、或いは「ロシア派」ドミトリイに無実の父親殺しの罪を引き受けさせる根拠となるところの《万人は万人に対して罪がある》というふうに出ることが出来る。勿論、これらのテーマは相互に密接に絡まり合っているわけであるが、『死霊』に即して見る時、とりわけ《万人が万人に対して罪がある》というテーマが重要である。『死霊』はこのテーマをドストエフスキイから継承しつつ、『七章 《最後の審判》」において、人間の範囲を越えて極小は「単細胞」に至り極大は宇宙的規模にまで達する大きな展開を見せている。

異端審問が激烈を極めた十六世紀スペインのセヴィリアにイエスキリストが再臨する。誰もがそれが「キリスト」であることにすぐ気がつく。「大審問官」は即座にイエス・キリストを投獄し、荒野の悪魔の誘惑に抗して奇蹟も神を試みることも地上の権力をも拒否したキリストの傲慢さを弾劾し続ける。それは同時に、愚昧な大衆を支配するためにそれらを敢えて一手に司どる自分自身の正当性の主張でもある。責任はイエスにあり、「大審問官」の自己犠牲において世の中はおさまっている。今更再臨などされては迷惑至極である。終始沈黙をもつて応えていたイエス・キリストは、やはり一言を発することもなく老いた「大審問官」の唇に接吻して、人知れず闇の中へ去つて行く——このような「大審問官伝説」をイワンは弟のアリオシヤに向けて、日頃頭の中で考えていた劇詩の構想として語る。それと同様に『死霊』においては、『最後の審判』の物語を「黙狂」矢場徹吾が普段から頭の中で考え続けていた想念として、

すく上の兄である首猛夫に向かって始め口を開いて語り出す。

《最後の審判》においてまず第一に弾劾されるのは、他ならぬイエス・キリストである。イエス・キリストは、いずれもが罪の根源であるあらゆる食物連鎖の最も罪深い端にいる人間の代表者として、彼に食べられて生命を落した魚によって糾弾される。このことは、「大審問官」が出発点であることを明示している。

《いったいお前はこのガリラヤ湖のなかで極度に異端の魚と仲間達にいわれたこの俺がお前に述べつづけたこれまでの弾劾の言葉にどう答えるかな。お前を無理やり「内界の無垢の人間」に仕立てあげてしまった或る偉大な作者が嘗てお前にさせたように、ただひとりきりでお前を弾劾しつづけているガリラヤ湖の異端の魚であるこの俺に、お前の窶れて瘦せた顔を寄せて無量の思いをこめた無言の接吻でもこの俺の口の上に、してみたらどうかかな。お、イエス、俺を食ったお前は、俺にこそ、無限無量の思いをこめたまぎれもなくまことの接吻をこそしなければならぬのだ。》

次に、やはり食物連鎖に関わる罪人の代表として此度は「東方の人」釈迦が引き出される。彼は、自分が食った「チーナカ豆」に弾劾され、「西方の人」イエスと同様に答える言葉はない。

さらに、生殖連鎖に関わって、餓死した両親から永遠に生まれることなく死んでしまった胎児の弾劾が始まる。しかし、この胎児もまた「四、五億の兄弟殺し」の連鎖の結果生じたのであってみれば、その罪を免かれることは出来ないのである。

食物連鎖Ⅱ生殖連鎖に関わる弾劾の階梯は、遂に「はじめのはじめに出現した自己存在たる原始の単細胞」に行きつく。と同時に、結局は「無限の空間、永却の時間を属性とする《無出現の思索者》」——存在宇宙と亡霊宇宙を含む全宇宙を創造してしまった者に対する弾劾へと至る。この宇宙の創造こそが過誤であった。《無出現の

思索者》がその過誤を総決算する時、つまり時空を消滅させて別の宇宙が創造される時、人間もまた人間であることを超え得るだろう……。

このようにドストエフスキイを継承しつつも壮大に展開される《最後の審判》において、むしろ見逃すことが出来ないのは、《胎児の弾劾》である。この「胎児」は、「五章」に遡って、高志のかつての恋人の胎内に宿っていた赤ん坊を直接的に想起させる。高志は自己の「革命理論」から恋人の出産を拒否する。彼女は、永遠に生み出されることのない胎児とともに高志のなかに生き続ける方法として自殺を選ぶ。ところがこの自殺は、政治的に利用される。つまり「査問」で殺された「一角犀」の遺体が彼女と並べて遺棄され、「心中」であるかのように擬装されることとなったのである。

「査問」以下のことは「フィクション」であるとしても、永遠に生まれることなく弾劾する胎児は、埴谷雄高の《個人的な体験》に深く根ざしている。

《ぼくのは単に子ども嫌いというんじゃない、革命というものは自分がやらなくちゃだめだ、子供にまかせると、必ず革命は墮落して自分の理想とするものではないほかのものになってしまうという考え方があったので、それでぼくは子どもをつくらなかつた。しかし、家庭戦争は非常にたいへんだったよ。》

このように切実な《個人的な体験》を「観念小説」或いは「形而上小説」にさりげなく挿入することもまた、その「壮大な観念のドラマ」である作品の上ではほとんど自己自身とその体験を語るこたがなかつたドストエフスキイの手法であった。

ドストエフスキイの最も切実な体験は、一八四九年「ペトラシエフスキイ事件」で逮捕された際の「死刑執行」であった。死刑判決はすでにシベリア流刑に減刑されていたのにもかかわらず、本人た

ちには一切知らされず、執行の段取りはすべて整えられ、最初に処刑される人々は銃の前に立たされた。そこで、ようやく死刑執行中止の合図の白旗がふられた。皇帝の慈悲を示す茶番劇であった。発狂する者、一瞬にして頭髮が白くなる者……ドストエフスキイはこの苛酷な試練に耐えてシベリアに流される。——この顛末は『白痴』において主人公ムイシユキン公爵の口から作者自身の体験としてではなく、『某氏の挿話』として語られる。

註

- (1) 『埴谷雄高ドストエフスキイ全論集』昭和五十四年七月、講談社刊。
- (2) テキストは、埴谷雄高『死霊』昭和五十一年四月、講談社刊。
- (3) 以下の「創作史」の記述は、昭和五十九年九月二十六日(水)付「東京新聞(夕刊)」所載の脇地炯記者によるインタヴュー記事『死霊』七章を完成した埴谷雄高氏の持続する思考(下)中の『死霊』小史』に拠る。
- (4) テキストは、註(2)に同じ。
- (5) 旺文社文庫版『罪と罰』(上)、昭和四十一年一月初版刊。
- (6) テキストは、昭和五十六年「群像」四月特大号所載「『愁いの王』——『死霊』六章」。
- (7) 『大岡昇平・埴谷雄高 二つの同時代史』昭和五十九年七月、岩波書店刊。
- (8) テキストは、昭和五十九年「群像」十月特大号所載「『最後の審判』——『死霊』七章」。
- (9) 註(7)に既出の『二つの同時代史』に拠る。